昭和三一年十一月二十五日発行
名古屋市中区裏門前町一ノ一
井上重兵衛方
名古屋狂言共同社
同人
電㉔三一七七番
印刷所　地上社　電㉔一一九六

―お願い―

先般の狂言大会の節の写真帳を造りたいと某氏にお願いしましたが祐善以後の写真を撮り損いました誰方様でも結構ですが「祐善」「狸の腹鼓」「三人片輪」「仁王」「喜撰」の写真を御撮影の方におゆづり願いたいと存じます「同人」

十二月の動き

十二月二日　支部能　能楽殿
能　小督　シテ大塚　一二　間河村　丘造
能　雲林院　シテ岩田田之助　間佐藤　秀雄
能　葵上　シテ柴田　収　間井上松次郎
狂言　芥川　佐藤卯三郎　井上礼之助

西の宮へ参詣の片輪者二人、互に自分の片輪をかくして同道する内、芥川にて両人共に相手の片輪を発見、笑ひ物にする内、相撲となる。生姜手の男とチンバの男の相撲の面白味と、両方が苦心して互に自分の片輪をかくす仕科のおかしみが本狂言の見所です。

十二月八日　河村鉦二氏敷舞台披
能　田村　シテ河村鉦二　間佐藤秀雄
狂言　福ノ神　佐藤卯三郎　井上松次郎　井上礼之助

有徳人二人、大社へ年越参りする所へ、福ノ神が出現して御酒を求め、両人に福を授ける。

福ノ神の出の笑いは、他の神物の出の一声や、下り端に相当する高雅な朗さを、舞台一杯に醸し出すものです。品位の中にこめられた笑の浸透したセリフ、人間味を多分に含んだ福ノ神の仕科。目出度い狂言の中に、折込まれた所世訓を聞いて頂きます。

十二月九日　宝生流　能楽殿
能　鉢ノ木　シテ戸田秀雄　間従ネ井上礼之助　早打歌村鴻一郎
狂言　不見不聞　佐藤卯三郎　河村　丘造　井上松次郎

太郎冠者がツンボで、留守を心配した主は座頭菊市を頼んで出かける、所在なさにツンボをなぶつた菊市を、太郎冠者は小舞を舞つて終つた合図に顔を足で撫でる。菊市之を悟つて平家を語るとて悪口を語る。ついにけんかとなり太郎冠者は相手を倒して入る。

盲は耳で相手の行動を洞察し、つんぼは目で相手の意図を観取しようと、虚々実々の仕科の妙がこの狂言のみどころです。

一月の予告

一月十五日　清韻会　能楽殿
能田村　間井上松次郎　能安達原　間佐藤卯三郎
狂言　昆布売　河村丘造　佐藤秀雄
一月二十日　能と狂言の会　自演と鑑賞
狂言　不須。文荷。太刀奪。三人片輪
能小袖曾我　間市橋良治
船弁慶　間市橋幸男
狂言　梟山伏　佐藤卯三郎　井上礼之助　佐藤　秀雄
一月二十七日　名匠鑑賞能　能楽殿
能小鍛治　道成寺　夜討曾我　間　間
狂言　木六駄　三宅藤九郎　和泉保之　野村又三郎　井上松次郎

発刊によせて

先般の追善狂言会については、格別の御後授を賜り、又種々と御懇篤なる御激励御批判を頂きまして感激致しております。「花子」についても本当の男女感情の妙諦が出し得なかつたとの批評、もつともと存じます。芸の未熟と此点充分承知しております。稽古々々、自得するまでの熱と練習がなくては、到低充分なる余裕をもつて出来ません。稽古場の無い事。体に暇のない事をおいても、芸に対する情熱は失つておりません、幸にも皆様の御支授によつて、盛会裡に終りました事を厚く御礼申上げます。　共同社　同人

× × × ×

「狂言」と云つてもピンと来ない人の多い時代。ドライな青少年の多い中から、本号予告にある通り来春一月名大、県立短大、市立女子短大、南大、愛大、名市大等の学生諸氏の「能と狂言の会」が開催され、進んで狂言をやつてみようと云ふ人が出て来た事は、斯道の為め同慶の至り「トロクサイ」と思はずに純粋の日本伝統芸術を守るつもりで、頑張つて下さい。

悠久六〇〇年の伝統をもつ古典芸能狂言を支持するものは、これからの若い人でなければなりません。私達は今こそモット〳〵狂言をよく知り、よく理解してもらう為、そしてこうした人々の益々増えるようにと、此さゝやかなパンフレットを捧げます。

× × × ×

此パンフレットについての御投稿と、御批判をお送り下されば幸甚です。

× × × ×

尚追々共同社並みの悪口や、いたずらも出ると思います、不悪御諒承の上、何分御支授の程たのみ上げます。

× × × ×

正面からこき下ろさずに裏面、側面から皮肉つて行く構想。一見単純に無邪気に見えていて噛みしめると深い〳〵味の出る狂言。

現代の世相に最もふさわしい表現をしている狂言芸能の真随を、御探賞下さい。未熟乍ら同人一同伝統を守つて精進する覚悟でおります。御支授の程願上げます。

―○短評○―

大蔵虎明が「童子草」の中に、はつきり

『世間の狂言は体もなくあはたゝしう、らうがはしく、そゞろ事をいひ、くね〳〵しく、かほほゆがめ、目、口をひろげ、あらぬふるまいをしてわらわするは、下ざまの者よろこび、心ある人はまばゆからん。是世上にはやるかぶきの中の、だうけものと云也。能の狂言にあらず。狂言の狂言ともいひがたし。』と注意している。

狂言の笑の理想は高いものである。為に其演出は場合によつては悲劇のそれより至難である。殊に舞台制約の厳重な狂言においてはである。多年の研讃と熱がなければ到底真随を伝える事は困難である。枯れた芸と云はれるまでの苦心と研究を思へば、追善会の彌五郎先生の三人片輪のキリの如きは正に傑作と云はねばなるまい。八十才近いとはみえぬ発らつたる景清の舞と云い。芸の力の偉大さをしみ〴〵感ぜさせられて、感激したものである。

× × ×

先般西川長吉師の喜撰を見物して感心していた人がこんな話をしていた。

「長吉師のあの枯れた踊りこそ、西川の本来の姿である。先代の能や狂言のとり入れ方の真剣であつた事が思い出される。歌舞伎化しない本来の日本舞踊の伝統は矢張り京舞の井上師辺りにあるのではないだらうか」と。

進歩も必要、発展も必要、だが本来の伝統を守る事もより大切だ、とはつきり感ぜられる意見だつた。

技術と品質を誇る……
EWE
ジュエルミシン
御問合は　狂言共同社（電㉔3177）へ